

## 平成 29 年度 紀の川流域懇談会 議事骨子

日 時 : 平成 30 年 3 月 8 日 (水)

場 所 : 和歌山県民文化会館 3 階 特設会議室

### ★ 議事次第

1. 開会
2. あいさつ (和歌山河川国道事務所長)
3. 本日の議事について
4. 議事
  - 4-1. 河川整備計画の進捗点検について
  - 4-2. 工事進捗について
  - 4-3. 平成 29 年の出水概要について
5. その他
6. あいさつ (紀の川ダム統合管理事務所長)
7. 閉会

### ★ 議事内容

1. 河川整備計画の進捗点検について (資料-1)

河川管理者が実施した点検結果の報告をしましたところ、出席委員より下記のような意見が出されました。

・ (P16 : 治水⑥)

平成 28 年 9 月に「紀の川の減災に掛かる取組方針」を策定しているとあるが、流域懇談会では紹介されたのか。公表されているのか。

→ 公表はしていますが、紀の川流域懇談の場では改めて紹介はしていません。ホームページには載せています。

・ (P16 : 治水⑥)

国、県、自治体と新しい「減災対策協議会」を作って防災にあたっているが、その中の、「紀の川の減災に係る取組方針」の中で、主として堤防に着目しているが、今の事業では、その堤防のすべりとかパイピングとかの対策を行っているのか。

→ 「減災対策協議会」でのハード整備では、天端舗装や、民地側の法尻補強等で、越水したときに破堤を極力遅らせることを位置付けています。

- ・ (P16 : 治水⑥)

堤防整備の施工箇所は、従来の堤防調査の結果に基づいて決めているのか。

→ 施工箇所は調査結果に基づいて決めており、P16のスライド右下にその位置図を示しています。
  
- ・ (P16 : 治水⑥)

洪水時に、HWL（計画高水位）以上の水位になったことがあるのか。

→ それはありません。
  
- ・ (P16 : 治水⑥)

この川は昔から無堤地区もあるし、完成堤といっても十分でないものもいまだにたくさんある。整備計画で、順次整備していくということか。

→ 無堤箇所等、まず築堤の必要な箇所等を行っていくことになります。
  
- ・ (P19 : 環境①)

これまでは大滝ダムでは毎年環境調査が行われていたが、これからは紀の川の水辺の国勢調査と同様にするということか。

→ 大滝ダムでは、試験湛水後、モニタリング調査ということで平成 24～27 年まで実施したものです。平成 27 年度以降は、大滝ダムも紀の川と同様の水辺の国勢調査として調査を行っています。
  
- ・ (P20 : 環境①)

確認種数のグラフを見ると、大滝ダムを造った後に徐々に良くなっていることを示している。大滝ダムの調査地点は、ダムそのものか、平均値なのか。

→ ダムそのものではなく、昆虫類は貯水池周辺の調査結果です。また、その他についてはダム下流での調査となっています。
  
- ・ (P20 : 環境①)

大滝ダムでは、底生動物の確認種が 3 倍も増えているが、各年度の生物調査は、調査方法等、統一されているのか。

→ 各年度、統一して同じ場所で実施しています。また、種数の変化は、洪水調節の有無も要因かと考えています。
  
- ・ (P29 : 環境⑤)

水質調査結果は船戸地点のみ掲載されているが、そのほか上下流には調査地点はないのか。

→ 船戸地点は一つの代表地点であり、上下流でも水質調査は実施しています。

・ (P29 : 環境⑤)

水質調査地点だが、「紀の川水質汚濁防止連絡協議会」では毎年測定の結果がされており、協議会では水質事故等の情報提供も報告されているが、それらの結果は提供を受けていないのか。

→ データ自体の提供は受けており、水道事業者の要請があり水道事業者の検査結果以外は公表しています。

・ (P34 : 管理②)

堤防の刈草を堆肥化して無料配布しており、土のう袋も 1 万 8,000 枚にも及ぶとのことであるが、コストが掛かっているのではないのか。

→ 有料で廃棄する処分費の方が高く、堆肥化して無料配布する方が 2 割くらい安くなっています。

2. 工事進捗について (資料-2)

河川管理者が工事進捗について報告をしましたところ、出席委員より下記のような意見が出されました。

・ (P9 : 柘榴川の鋼製枠カゴ)

蛇籠 (鋼製枠カゴ) が出ているが、施工後に植物等が生えるのか。また、樹木が生えてくることによって強度が増すのか、それとも徹底的に植物が生えないようなコンクリートがいいのか。

→ 柘榴川で鋼製枠カゴを使ったドレーン工を実施しましたが、いずれ植物は生えてくるので、草刈は必要となります。堤防の樹木という観点からは、破堤の原因となるため伐採します。

・ (P10~12 : 岩出狭窄部対策)

岩出狭窄部対策では、かなり大規模な河道掘削を計画されているが、生物調査、環境調査は行われているのか。

→ 掘削工事に着手する前に環境調査を行い、ミゾコウジュ等の貴重種の移植等を行っています。

・ (P10~12 : 岩出狭窄部対策)

JR 和歌山線は和歌山で一番古い線路であり基礎も古いものであるが、その上流を掘削したときにどのような影響があるのか。

→ バイパス水路は、屈曲させて JR の橋脚にできるだけ当たらないよう水流の向きを変えるよう施工の工夫を行っています。

→ 地元に長く住んでいる人にヒアリングすると、橋脚のまわりの土砂は減っているようです。しかし、この河道掘削では、岩盤まで全部出すというのではなく、全部土砂を取ってしまうのではなく、土砂の流れもあると考えています。

- (P10～12：岩出狭窄部対策)

この橋脚は、洗掘されるたびに補強することを繰り返してきたが、よく手入れされている。今回の狭窄部対策で流れが変わっても、経過や変化を十分調べる必要がある。

→ 委員からモニタリングを行ってはどうかという助言を頂きましたが、前向きに考えたいと思います。

- (P10～12：岩出狭窄部対策)

掘削にともなって大量の土砂が発生するが、何か有効活用することを考えているのか。

→ 全てではないが、圃場整備用の土砂として有効活用を行うものとしています。

### 3. 平成 29 年の出水状況について（資料－ 2）

河川管理者が平成 29 年の出水状況について報告をしましたところ、出席委員より下記のような意見が出されました。

- (P10：浸水状況)

紀の川大堰の減災効果はなかったのか。

→ 紀の川大堰は、取水用の施設であり洪水調節は行なわないので、治水効果はありません。

- (P10：浸水状況)

かつての洪水の際、大台ヶ原の降雨量は 2,400mm くらい、今回の 777mm の 3 倍くらいであるが、内水氾濫が起きた場所は今回も同じような場所であり、内水氾濫が起りやすい場所で、今回も発生したという理解でよいか。

→ そのとおりです。昔からの住宅は少し高いところにあり、今回内水氾濫が発生した箇所は、従来は住宅等がなかった区域です。公共的な施設等は地盤を上げて浸水しないようにしていますが、ミニ開発等で建てられた住宅が浸水しています。

- (P10：浸水状況)

水防団の構成員が少なくなって問題となっているが、これまでの洪水で水防団が出動された事例は多いのか。

→ 今回の出水でも、水防団には巡視等を行って頂きました。外水氾濫はなかったのに、土のうを積んだりすることはありませんでした。紀の川に限らず、水防団の構成員の高齢化は進んでいます。

・ (P10 : 浸水状況、P11 : 大滝ダム)

大滝ダムの洪水調節による水位低下効果は、下流の和歌山市付近等に及ぶのか。貴志川付近で浸水があったということは、このような大きな台風の場合は、下流部では大滝ダムによる防災効果はないと見ていいのか。

→ 河川整備計画の検討の際には、ダムの有無で船戸地点等の流量を計算しており、検証すれば効果は幾分出て来ると思います。

→ 浸水状況の写真（貴志川合流点付近）は、内水による被害であり紀の川に降雨が吐けなかったのが原因です。

・ (P11 : 大滝ダム )

大滝ダムでは、平成 29 年 10 月の台風 21 号の洪水で、1,500 万 m<sup>3</sup>を貯留したとのことであるが、全部では 5,000 万 m<sup>3</sup>くらいあるはずだが、運用できるのはどれくらいの範囲なのか。

→ 大滝ダムは、伊勢湾台風規模の洪水に対して 2,500m<sup>3</sup>/s の放流を行うのが本則操作ですが、現在は下流の河川整備状況を踏まえ、それを 1,200m<sup>3</sup>/s の一定量放流として少し規模を小さくしています。治水容量は、台風期は、6,100 万 m<sup>3</sup>、梅雨期は、4,500 万 m<sup>3</sup>を確保しています。

→ 今回の出水は 10 月後半という季節外れの洪水で、洪水前に前線による雨量があり少し溜めてから本番の台風を迎えた経緯があり、現在の操作規則の 1,200m<sup>3</sup>/s の一定量放流を行いました。

→ 容量的には余裕がありましたが、降雨の予測精度がもう少し向上すれば、別の操作も考えられるかと思えます。

以 上